た。

父と母

大友一夫

◆おおとも・かずお．医師．大友内科医院院長．埼玉県秩父市．

辻井伸行のピアノ演奏を聞いたことがあるだろうか？クラシックに詳しい訳ではないが，イギリスBBCプロムスでのアンコール曲「ラ・カンパネラ」は圧巻である。高度の技が要求される曲だが，緩急織り混ぜながらも滑らかで，大小の鐘の音を左右の手で弾き分ける。大歓声と拍手が鳴り止まなかった。ドイツでベートーベンの「月光ソナタ」を演奏したときには，涙を流しているドイツ人もいた。彼のピアノの優しい音色に，祖国のベートーベンの哀しみを感じ取ったのである。また東日本大震災のときには自ら作曲した曲「Elegy for the Victims of the Tsunami」を，彼は大粒の涙を流しながら奏でていた。

辻井伸行は産婦人科医の父とフリーアナウンサーの母との間に生まれたが，生まれつき小眼球症で目が見えなかった。両親の苦悩は推し量れない。ただ幼い息子の音楽の才能に気づいた母親は，1歳半でピアノのレッスンに通わせ始めたのである。彼はピアノを嫌いになったことは一度もなく，伸び伸びと成長して行った。数々の日本での賞を総なめにし，やがて21歳の時，ヴァン・クライバーン国際ピアノコンクールで優勝した。クライバーンは「彼の演奏には神様の存在が感じられました。彼は心が純粋で美しい調べを奏でます」と絶賛している。

ほぼ二人三脚で歩んで来た母親は，盲目の彼を美術館や花火に連れて行ったりして，美しいものに触れる機会を与えることを忘れなかった。そしてただただ彼を褒め続けた。一方父親はピアニストとなる前に一人の人間として育つためには甘やかせ過ぎては駄目だと言って厳しかった。伸行は中学のころ，父親との確執があり反抗期があったという。先のコンクールで優勝したときにも，インタビューで父親は「“盲目の”ピアニストとか“盲目の”が付いている内はまだピアニストとして一人前じゃない」と語っている。ただ「(伸行が)目が見えなくてもいいんだけれども，…一日だけ目が見えて…家内の顔が見たいと言ったときはちょっとかわいそうだなと思った」と声を詰まらせた。伸行は今では常に両親に感謝している。父と母のそれぞれの愛情に支えられてこの天才ピアニストは育まれたのである。

わたしも中学時代，父に対して反抗期が続いた。高校の時には，芸術方面に進みたかったわたしを母は後押ししてくれた。しかし父は医者はつぶしが利くので，医者になったら何をしてもいいと反対した。芸術家になっていたら，今頃才能の無さに気づいて路頭に迷っていたかもしれない。俯瞰的に見る父親の役割は盲目的な母親とは違うのである。

2021年1月から米下院議会では，議会で「父」や「母」など性別を規定する言葉の使用は許されなくなった。信じられないことだが，ポリコレ先進国のアメリカでは以前から「メリークリスマス」とも言えない言論統制が敷かれている。これまで白人が犯して来たさまざまな差別に対する反動からであろう。負い目を感じているのである。かつてキリスト教社会では同性愛に対する厳しい弾圧もあった。日本ではもともと同性愛には寛容であったにも拘わらず，アメリカの意向を受けてLGBT法案がどの国よりも先に可決された。移民政策を推進しているのもその一環である。アメリカばかりでなく，今ヨーロッパでは大量移民で国そのものが崩壊しつつある。

沖縄の我那覇真子はわたしが最も信頼する国際ジャーナリストである。彼女は友達から珍しいと言われる程家族仲が良く，彼女の保守的な言論は父親の影響を受けているという。家族関係を壊し，国を取っ払おうとする大きな動きに疑問を抱き，自らの足で世界を駆け巡っている。マスメディアで伝えないことを発信し続けているのである。LGBT教育で性転換して後悔している少女たちや

その家族にインタビューしたり，パナマではアメリカに向かって続々と北上している移民の大集団に密着取材している。ダボス会議にも直撃取材を試み，先の日本におけるパンデミック条約反対の１万人を越えるデモにも参加して発信している。これさえ日本では一切報じられていない。

しかしポリコレで以前とは見る影もなく崩壊しつつある欧米でも，家族や祖国を取り戻そうとする人々が目覚め始めたという。父や母，そしてご先祖様を大事に思うような日本では当たり前の情緒。これを世界に発信し続ける辻井伸行や我那覇真子の優しい眼差しを，世界の人々と共有したいものだとつくづく思う今日このごろである。